月刊ナイトバグ　大豆ペプチド0mg含有リグルのマガジン
NIGHTBUG
2011年
2月号
豆まき‼弾幕ごっこ‼ひええ
「節分」特集
読切り作品
SS　:○(仮名)/くろと
漫画:13/preudenano
連載作品
漫画:怒羅悪/草加あおい/
クロツク

月刊ナイトバグ　2011年2月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

2月号テーマ

節分特集

『今年は勇リグがはやる』　東

節分特集とゆうことで、安易に勇義ねえさんとリグル。
どうゆう状況なのかは謎ですが…
とにかく勇リグもっとはやれ

『さぁ、お前の豆を数えろ』　キッカ

リグルさんはいくつ食べるんでしょうね

『 バカルテットVS鬼 』　貴キ

久々に大人数描きたかったのですが時間ががが・・・

『 寒い冬の大事な食料 』　残虐非道の貴公子

なんとなく衝動的に小動物（？）リグル

『 妹紅とリグルと豆 』　豆板醤

節分は平日(ˆ ω ˆ ∪)

春待夜にくだをまくこと

○（仮名）

‡　‡

二月の二日。
腹に響く鐘の音で、リグルは目覚めた。
酒臭く、香ばしく、そして木目が香った。
あたりは、すっかりと暗い。

リグル・ナイトバグは、蟲の妖怪である。もう少しいえば蛍の妖怪で、蛍と言えば成虫は水しか口にしない。だがそこは妖怪なので、リグルは肉も喰らえば、酒も喰らう。

突っ伏していた木日のカウンター、手の中にある杯に、酔っているとはいえ虫の嗅覚で感じるものは甘い酒の薫り。

そういえば良い酒が偶然手に入ったという（なんでも夜歩き好きの妖精から、食い代にまきあげたらしい）話で、友人たちから声をかけられたのだったと思い出す。

昼日中から痛飲したんだったなあ。

あれはいけない。飲み口が甘い上に軽く、すぱすぱと杯を空けるうち、気付けば時間毎、普段のまず倍の量は飲み干していた。

なんとも甘露であったものである。

それが手の中に、なんと若干量残っている。

リグルはみごと潰れたらしい。だが、その手の中まで啜る手合いはいなかったと見える。

こちらの水は甘いんだろうなあ。

赤ん坊の小指ほどもかさが残っていない清酒を、名残り惜しげに口へ運ぼうとすると、炭のはぜる音がひときわ大きく耳に届き、

「あれ。起きたんだリグル。大丈夫」

聞きなれた声がかかった。

割烹着にほっかむりで、あかあかと燃える炭火の向こうに、串を返すのは見知った顔。板についた女将振のミスティア・ローレライ。

「ああうん。大丈夫」

頭痛もなければ寒気もない。宿酔は兎も角、風邪などひかないのが妖怪の信条だ。

それでも春先もどきの気候はやや肌寒く、残った清酒を口に運ぶと、胃の腑へ落ちる熱が心地よい。

ふと見れば、見慣れた青髪の氷精と緑髪の妖精が、仲よくカウンターへ突っ伏していた。調子よく飲んだチルノがとっとと潰れたあと、それを見届けた大妖精が安心したように落ちるのは何時もどおり。

その向こうで、やはり見知った金髪の妖怪少女が、さも旨そうに串焼きを頬張っている。これもいつも通り。どこへ入るのかと思う。

蛍に氷精その連れ合い、闇妖に夜雀という何時もの面子は、何時ものように夜雀の屋台を河岸にしていたのだった。

違うことといえば、普段は日が落ちてから暖簾をあげる夜雀の屋台が、夕日というにも早すぎる刻限から、八目鰻の蒲焼やら川魚の塩焼きやらを焼く煙を立てていたことだ。

要するに、開店前からメートルを上げていたのだ。こいつらは。

店主公認なのだからいいのか。いいんだ。

「今、何時?」
「暮六つ。そろそろお客が出始めるころだね」
「え?」
まだ殆ど冬、暦でも冬。日は短いのだが、それにしたって馬鹿に暗い。なんでさと言う前に、隣にいるルーミアのことを思い出した。
「どうしたのー?」
「いや、なんでもない」
何時もより闇の範囲が大きい気がするが、まあ調子の問題なのだろう。いい御酒の所為で気が昂ぶっているのかもしれない。もしやいまやけに肌寒いのは、そこで寝こけている氷精が、夢の中でハッスルしているせいか。
「むにゃ……せっとすぺるかーど……」
もしかしてそうなのか。
「そうなのか?」
「そーなのかー?」
「そうなのかー♪」
「いや、被せなくていいから」
それにしても、暮六つ。飲みはじめたのが夕の七つ頃だったから、ほとんど一刻もせず潰れてしまったことになる。
「ねえ。私、どれくらい寝てた?」
「串焼き二皿目ごろからかなー?」
「チルノより早かったよ。だから、大丈夫?」
「……疲れてるのかもね。ごめん、ありがと」
騒がし屋の氷精より先に倒れたとなれば、それは騒々しく叩き起こされたことだろう。それでも感じず突っ伏していたとなったら、心配にもなるだろうというものだ。
「そっか。まあ、冬場だしね」
「うん。啓蟄前だからさ。眠くって」
「無理しちゃダメだよー?」
無理するな、と言った闇妖の声がくすくす笑いを含んでいるのは酒が入っているせいだ。そうだと思う。頬にほんのりと赤みがさし、深刻な顔などしようもないと言わんばかりににこにことしているけども。
まあたぶん、心配してくれているんだろう。ああ見えて友達甲斐のあるやつだというのは、ほかならぬリグルがよく知っている。
「無理なんてないよ。冬の間はほら、暇だし。誘ってもらえればどこへでもいくって」
これはほとんど本当で、ちらりとだけ嘘だ。大概の虫が越冬睡眠中か卵のままである冬は、虫使いにとって暇な時期である。悪友たちとつるんで遊ぶのも心底楽しい。
けれどリグルもやはり虫なので、生存周期からしたら冬場は眠りたい。とくにこの冬は冷え込むから。
無性にあたたかいものが欲しくなった。
「ミスティア、私にも串頂戴。熱々のやつ」
「はいはい、ちょっと待ってね、と」
手元の猪口を手酌でひとくち呷ってから、返した串へひとはけタレを走らせて、
「あいよ、蒲焼あがり。熱燗もつける?」
「うん、お願い。いただきます」
ほかほかと香ばしい湯気を立てる蒲焼に、少し七味をかけてからかぶりつく。癖の強い八目鰻の味に甘からいタレがよく被って、
「はあ。生き返るなあ」
「死んでたのー?」
「慣用句だってば」
ひょうと風が吹いた。襟元を掻き合わせる。冷やすのと光をさえぎるのと、夏場に向いたメンツはいるが冬の寒さにはいたって弱い。地の底にいるとかいう熱いカラスでも、今度誘ってみようかなあと思う。しかしチルノが夏に溶けている光景を思うに、火だの熱だのあつかう妖怪でも、冬場は凍えるのだろうか。なにしろカラスだ。山の天狗の処のだって、冬場には丸まって震えているものだし。
そういえば。
こうして他の妖怪のことを考えるなんて、むかしはあまり考えられなかったのだ。と、リグルは思う。
御山の天狗と河童は、幻想郷が仕上がったころから人間もどきの生活をしていたらしい。けれども他の妖怪たちは、おのおの気侭に、もう少しいえば不干渉に生きていたものだ。賢く力の強い大妖怪たちは、結界の管理運営をしていたともいうが、数からいえば少数だ。
生きる自分と、獲物にする人間というのが、妖怪大多数の世界観だった、といっていい。妖怪が人を襲うことを許容する、この幻想郷の根っこにあるルールは、そうした生き方を肯定してくれるものでもある。たまに徒党を組むことがあるとすれば、それこそ大規模な異変を起こして一花咲かせようと企む大妖と従う部下たちくらいのものだったはずだ。

カウンターを眺める。いつもの光景だ。
自分でいうのも何だがサンピン妖怪が二人。妖精がふたり。力が規格外だとはいえ、妖精が妖怪と対等につきあっている。
「どーだぁ……まいったかぁ……むにゃ」
「チルノちゃんだめだよぅ……うーん」
若干うなされているが、大丈夫かいな。
まあ、ともあれこのほほえましい光景も、時代が時代なら、きっと考えられない事だ。
といっても、まだまだ若手であるリグルは、その時代をよく知らないのだが。
「あいよルーミア、串のおかわりね。あとはリグルに熱燗。いいお酒は切れちゃったけど」
「いいよいいよ。熱々なだけでご馳走だし」
手酌で一杯。身体の中がかっと熱くなる。やっぱりこれだなあと息をつく。ルーミアのほうは、酒より食い気だとばかりに串焼きをがっついている。
「美味しい？」
「美味しいよー」
「味付け変えてみたの。里人にも好評でねえ」
言いながらミスティア、手際よくさばいた八目鰻に串を打ち、蒸籠に入れては蒸し器にかける。ルーミアの分にしても多すぎる。
「……作りすぎじゃない？」
「そんなことないよ？　最近好評だからね。お客さん増えてるの」
「ああ」
そうなのだ。
ここは屋台で、つまり御店で、お客が来る。人間相手にだって商いをしているのだった。
「私たちさ。いていいの？」
「いいって、何が？」
「お客さん来るのにさ、ほら」
「よくわかんないけど、いいんじゃない？」
わかんないなと首を傾げるミスティアは、別になにひとつ気にしていないようであり、考えてみたら妖怪の屋台に呑みに来るような人間となれば最初から覚悟完了しているので、客か否かの境界域で妖怪がたむろしていても、別に問題がないのかもしれない。
だいたい、あの紅白巫女だの白黒魔女だの、最近では青白巫女（もどきらしいがよくわからない。直接会ったというチルノも区別する気がないようだし）なんて連中、これはもうそこらの妖怪より数段タチが悪いではないか。
酒が回って火照った頭で、ぼんやり過去のトラウマをほじくっているうち、とろとろとまた舟をこいでいた。
遠くから腹に響くような暮れ六つの鐘の音、辛うじて意識をつなぎとめながら、これから書き入れ時なら三人もカウンターで撃沈しているのはまずいよなあどうしようかでも眠い。
そうだ。
人間と居合わせたら、どんな顔をしよう。
頭がぐるぐると廻り、またもふっつりと、リグルは意識を手放した。

‡　‡

ひょうと風が吹きこんで目が覚めた。寒い。
八目鰻と墨書した赤提灯がひかっている。
身体を起こすと、沈んでいる妖精コンビと淡々と美味そうに食べ続ける闇妖に加えて、客の姿が増えていた。
人間ではない。
さも美味しそうに熱燗を啜っているのは、厚手のロングコートを羽織ったロングヘア、頭から飛び出した耳は以前投票したところ、満場一致で作り物だということで決定した。永遠亭の月兎である。
「おはよう。妖怪だからって、そんな恰好で寝てると、からだを壊すわよ」
「ありがと。……ええと、うどんげさん？」
「……鈴仙・優曇華院・イナバよ。できれば、ちゃんと呼んでね。あなたは？」
憮然とした表情であり、ちぢめて呼ばれることに何か心の傷でもあるのだろうかと思う。
「あ、リグルです、リグル・ナイトバグ。じゃあ鈴仙さんで。にしたって珍しいなあ」
「そうでもないわ。ここ、里から近いでしょ」
「そりゃそうだけど。あなた、妖怪だよね？」
確かに夜雀の屋台は、人里から適切に近い、森の中が定位置になっている。鈴仙も妖怪、目撃スポットから外れてくる気がするのだが。人里付近は後生が悪い気もするのだが。
「いやあ。鈴仙、常連だよ。ここのところ」
「うちの姫が、ここの蒲焼をお気に入りで」
俗っぽい御姫様もあったものだ。

「にしたって、お屋敷って迷いの竹林だよね」
「そう。だから、仕事のたびに買って帰るの」
熱燗を干して、鈴仙。リグルは首を傾げた。
「仕事？」
「薬売り。置き薬の補充だけじゃないのよ」
そもそもリグルは、永遠亭の薬師が置き薬を売っていることも忘れていた。天狗の新聞で読んだ気がする。人の家にあった気もする。けれども病気とは無縁の妖怪。縁がなければ忘れるのは、種族を問わず世の常だ。
「お疲れ様。ごめん、ここのとこ人里に出入しないもんだから、ぜんぜん知らなかった」
「だいじょぶだいじょぶ、私も知らなかった」
止めどなく何かを口に運びながらルーミア。お行儀悪だなあとちょいとみれば口の周りに米粒がついている。食べているのはおこわか何かのようで、実によいにおいがする。
「ミスティア、それ新製品？」
「中華風ちまきってやつ。紅魔館の門番の人にならったの。蒸し器使ったメニュー増やそうと思うのね。仕込めば手間もかからないし」
なんともがっちりしている。底冷えする風がまた吹いて、一瞬迷い顔になった鈴仙、
「そっちは、冷めたら美味しくないわよね。……おかみさん、私にもちょうだい」
「あ。私も」
「あいよ、まいどありー」
ほかほかと湯気をたてるちまきは、熱々のもち米の中に油揚げ、ぎんなん人参ごぼうに椎茸と入って、少し油ぽいのがまた美味しい。

「ううん。おかみさん商売熱心よね。うちも、何か考えるべきなのかしら」
「はふ。……何かって、新しい薬とか？」
口の中の熱々のせいでもって、喋る口から炭火の前でもなお白く息が出る。お行儀悪もまあいいや。どうせ飲み屋の席なんだし。
「それはまあ、師匠の気まぐれだから。もう少しね、ひと様に愛されるやつよ。たとえば外界の楽売りは、玩具で子供を籠絡するの」
「籠絡？」
「攫うらしいわ」
「人攫いっ！？」
「そうなのかー」
人里に入り込んでいる日的はそれだったか。永遠亭には天才薬師がいるというし、そこで寝こけている悪友氷精とは一味違って本物の天才なら、湯水のように新薬を作り出したりできるのだろう。なら実験台はいくらいても足りないはずで。
そういえば確か、永遠亭には兎がたくさん。
「いや、種族の地位向上しようっていうのはわかるし妖怪が人を襲うのも当たり前だけど、そんな身代わりでデク狩り大サービスみたいなのはどうなのさ！？」
「いやいや違うから。違うから。なんとなく想像の中身はわかるんだけど、うちの師匠、そういうのはいらない人だから」
「商いのコツは、自分が損しないくらいに、相手が得したと思わせることなんだってさ。はい鈴仙さん折詰。おまけしといたよ」

差し出された竹皮包みに、残ったちまきをあわてて頬張った鈴仙、その顔は一瞬確かにちょっとうさぎっぽいが、ほほ袋なら兎より栗鼠のような気もするなあとリグルは思う。
「ありがとう。でも、兎ばっかりだからねえ」
「そう来ると思って、ちゃんと野菜串ですよ」
さらりと言うミスティアは、普段つるんで馬鹿をして、遊びまわっている時とはどうも面影が違って、明らかに商売人というか。
「商売はんじょーささもってこーい♪」
思いついたようにお気楽に歌う様子はいつものままだが。そしてまた、その内容が妙に流れを追っているようなのも。
「ミスティア、心とか読めないよね？」
「私夜雀だし、それ無理。どしたの？」
「気が利くってことでしょう。そうね、何かおまけとかつけるにしても、考えなきゃね。人間ってちょっとわかりにくいし……」
大真面目に、人への商いを考えている。だから、それじゃまた、と席を立つ鈴仙を、リグルは呼び止めた。思わず。
「あのさ、鈴仙さん」
「何、リグル？」
何を言おうとしたんだったかな、と、酒で少しぼやけた頭から、自分を動かしたものをほりだして形にする。
「人里で商売するのって、大変じゃない？」
一瞬何を聞かれたのか、というきょとん顔をした鈴仙は、さらりと答えた。
「だって、幻想郷じゃあ当たり前でしょう？」

‡　‡

熱燗のお銚子、いくつ目になったか。

「止めといたほうがいいんじゃないの？」

「いやもう、寝てすっきりしたからさ」

なんでか、飲まずにいられない気分だった。むこうではルーミアが快調に皿を重ねていて、その向こうでは妖精二人が寝息を立てている。この調子だとどちらも、朝までこのまんまだ。けど、ヤケ食いだのふて寝だのじゃあるまい。

　そうだ。

　鈴仙が戻ってからもう半刻。

リグルは、ひどく落ち込んでいた。

「ね。も一本、ちょうだい」

「しょうがないなあ。控えときなよ」

「うん」

　かちゃかちゃと、お銚子を湯に漬ける音。

どうしてかミスティアのほうを見られずに、カウンターの木目ばかりじっと睨んでいると、横合いからすっと串焼きの皿が差し出された。

　視線をあげると、首を傾げたルーミアの顔。

「食べる？」

「……これ、野菜ばっかりじゃない」

　食べ残しを回してきたのかこの肉食系。

「あんま食べないでお酒は、良くないよー」

　その表情はいつものように能天気で、何を考えているのかどうか、心配しているのかも読み取れないが。まあリグルも虫の妖怪で、野菜の焼き物も嫌いではない。

「ありがとね」

「気にしないでね。楽しく行こー」

　どうもミスティアとルーミアに挟まれると、いつもの仲間で自分が一番バカじゃないかと疑いたくなる。チルノの底抜け加減、改めてみると救われてるのだなあと自覚する。

「そうそう、楽しく飲まにゃあ損損！」

「わあっ！」

　いきなり耳元で、聞き覚えのない馬鹿声に、リグルはびくりと跳ね上がった。

「おやすごいねえ。蛍というより精霊飛蝗だ」

けらけらという邪気もけれんのない笑い。

いつの間にそこへいたのか、特大の瓢箪から、手酌どころか喇叭でやっているのは、大きな二本角のちびっこの、

「げえ、鬼！」

「鬼だよ。いいじゃん別に攫わないしさあ。あ、摘まむもの頂戴、美味しそうなにおいでもう辛抱たまらん」

「はいはい、毎度ありがとうございます」

「ああ、二人前ね」

　二人前？

「萃香、突っ走りすぎだ。……おや盛況だな」

「ありゃ、里の先生。鬼と一緒に？」

　暖簾を上げて入ってくるのは、里の守護者、寺子屋の先生もつとめる妖怪、半人半白澤の上白沢慧音。

　連れ立ってやってきたは、鬼の伊吹萃香。

　これはちょっと珍しいという話ではない。考えられないような組み合わせだ。

　床机にかけた慧音は、ほかほか湯気の立つ熱い蒸しおしぼりで手を拭って、息をついた。

「君が疑問におもうのはもっともだが、明日は節分だろう？　ああ、私は熱燗を頼む」

　言われて、ようやく思い出した。

　今夜は二月二日。明ければ二月三日。

　節分。人里では、鬼遣らいの日である。

「ありゃ。リグル、何見つめてんのさ」

　思わずまじまじと、酒の朱が入った小鬼の横顔を見つめていた。

　惚れたかー。とけらけら笑う小鬼。

「……萃香さん。私、確か名乗ってないよね？何で名前知ってるの？」

「そりゃあ鬼だから」

　けらけらと笑う。

「へえ。ねえ、私の名前もわかる？」

「ルーミアだろ？」

「わあすごい。ねえ串焼き食べる？」

「お、悪いねえ」

　目の前で行き来する熱々の串焼き、目眩のするリグル。見かねて慧音が割り込んできた。

「萃香はな。幻想郷の人妖の名と顔を、大概覚えているそうだ」

　霧になって、辺りじゅうを見渡せるからな。と、先生慣れした口調で続ける。さすが上古の大妖怪、生易しいものではない。リグルも蟲を動員すれば、似た様な事がやれはするが。

　酒にとろんと定まらぬように見える萃香の目が、それでもすべてを見通しているような空恐ろしい気分になり、リグルは身震いした。

「あははは。だからなんもないって。今すぐあたしと力比べしたいなら、付き合うけど」
　けらけらと笑う。
「いえいえ遠慮します！　遠慮します！」
慌てて両手を振り回す。迂闊に勝負なんてしようものなら、きっと三日は寝たきりだ。
　悪友たちはとみてみれば、妖精は寝ていてルーミアは食べてミスティアは焼いている。妖精は起きていれば適当に突っかかって騒ぐだろうし、ルーミアは見ての通り。ここが店でなければ、ミスティアも動揺するだろうか。けれど現状はこの通りで、どうにも、自分が一番の小物のような気分になる。
　思わずため息をついたリグルの、お猪口の表面張力ぎりぎりに酒が注がれた。酔った手ともえ思えない名人芸は萃香の仕業であって、リグルの鼻が正しければかなり良い酒だ。
「まあ飲め飲め」
「はあ、ありがとうございます。……うわ」
　勧められるままに一口するとかなり強く、すでに酒の熱が入っていたはずの体がかっと熱くなった。
「でさ。何を聞きたい。あたしは嘘が嫌いで、おためごかしも好きじゃないなあ」
「う」
　小柄なリグルより（角を除けば）二回りも小さい萃香の絡んでくるのが壮絶な威圧感で、思い切り気圧される。こんなときに限って、悪友たちからの合いの手は入らないのだ。
　どうしようと視線をさまよわせていると、
「行き会ったのも何かの縁だ。なに、明日の打ち合わせは終わっている、面倒な話もない。遠慮なく聞いてくれて構わないよ」
　完全に善意としか思えない慧音の追い討ち。全霊でたじろいだリグルは、猪口に注がれた酒をくいと呷って嘆息する。
「あのさ。萃香さんさ」
「さん付けは止めといてよぅ。むずむずする。止めてって言っても止めてくれない半人前は、だいたい一人でいいから」
　今夜逢うのは呼び捨て好みの相手ばかりか。いろいろあり、喧嘩腰でないときには下手に出る癖のあるリグルからすると、やりにくい。
　冷め加減の野菜串を齧って酒を流し込み、勢いをつける。助走完了。
「打ち合わせって、節分の豆まきだよね」
「鬼は外ってやつだねえ」
　瓢箪から直接酒を呷りけらけらと笑う小鬼の様子に、何も含むところは見えない。
　なんでだ。
「そういうの、嫌じゃない？」
「嫌じゃないね」
　即答だった。リグルには飲み込めない。
「ああ。今回の件なんだが、萃香の方からの申し出でな」
「え？」
　鬼に大豆は大敵じゃないのか。湖の吸血鬼、確か魔女の気まぐれで豆を山とぶつけられて半べそになっていたとか。屋敷に紛れ込んだ夜歩き妖精からのタレコミだが。それなのに。
「だってさぁ。楽しいじゃん」
「楽しいって……追い払われるのが？」
　けらけらと笑う。容姿とは裏腹に、様子はひどく大人びていた。
「違うよ。豆撒きなら誰でもできるっしょ？」
「そりゃまあ」
　煎り豆の一つかみなら、それこそ子供でも投げられるだろう。
「したらさ、弾幕ごっこしようにも力不足な人間どもとも、心置きなく遊べるじゃない」
「それは……そうだろうけど」
　博麗の巫女が幻想郷全土へ、命名決闘法、いわゆるスペルカードルールを発布してから、ずいぶんと経つ。リグルも頻々と参加しては叩きのめされ、たまには勝ったり負けたりと活用しているうち、完全に日常になっている。
　言うのは何だが、リグルは弱い。だから、自分よりさらに弱い者、という要素が、半ば意識の外だった。何しろ夜道で襲える人間もおらず、つきあいのある人間ときた日には。
　でも。だからといって。
「それだけの理由で？」
「それ以上の理由はないなあ」
　あっけらかんと言い放ち、けらけらと笑う。
「防災訓練、兼防災訓練、という感覚だな。八百長というわけではないが、だからといって、加減のある落としどころを飲み込んでもらった」
「真正直に相談されると断れないねぇ」
　けらけらと笑う。

自分より、恐ろしく年嵩の大妖怪のはずだ。はずなのに、瑞々しいまぶしさのようなものを覚え、リグルは思わず萃香から目をそらす。
「なんだいその反応。生娘でもあるまいにぃ」
「き、生娘って……いや！　そうじゃない！　なんでもない、なんでもないから！」
「嘘はいけないなぁ」
　ついと坐った目で睨まれた。息が詰まる。
「なんだ、あんたも鬼役やりたいのかい？　蟲なら、いいセンかなぁ。どうだい先生」
「いや、萃香よ。どうしてそうなるんだ？」
　熱燗をちびちびとやっている慧音の耳目が、酒で曇ってくれることをリグルは祈っていた。一瞬心が動いたことを悟られるのが、何だかひどく恥ずかしかったのだ。
「確かに晦日の鬼遣らいといえば、虫追いの祭事が遠くはないが。その手の話なら、寧ろ霊夢あたりの領分だろう」
「神事増やすって、張り切ってたっけねぇ。だと、止めた方がいいかなぁ。霊夢じゃあ、加減が利かないから。お祭りになんないや」
「巫女も、鬼に言われたくはないだろう」
　やや呆れたような口調、酔った顔にまでもわずかに浮かび上がる疲労の色からするに、明Ｈのお祭りをきちんととりつけるまでの間、慧音も相当苦労したのだろう。ただ、霊夢に退治された経歴持ちのリグルからしてみれば、あの巫女にそんな祭を任せたら、碌なことにならない気はした。弾幕ごっこを創案したのだって、好き放題に暴れるためじゃないのか。
「でもさ。里の人はいいの？　本物の鬼って」
　鬼と言えば、ながらく不在にしてもなお、その名の轟く大妖、人にとっての畏れの権化。そんなものが堂々と里に入ってくるとなれば、難色を示す人もいそうなものだ。
「別に気にしていないな。いや、気にしないというわけではないし、私も敵意ある妖怪が里へ這入ろうとすれば全霊で阻止するが」
　いかにも彼女は、人里の守護者なのだった。
「じゃあ、なんで」
「いまは、そういう時代だからな」
　はにかんだような微笑みを浮かべ、慧音は杯を傾けた。萃香も、得たりとばかりに頷く。
「私も昔は、よく人を攫ったもんよ。でも、こっちへ出てきてからは滅多にない」
　たまにはあるのか。
「たまにやるけど。でも、やんなくてもいい。だってさ。そうでなくても遊べるんだものね」
　くい、と瓢箪を呷り、いい時代だよねぇ。と、しみじみした調子で萃香は続けた。
「弾幕ごっこが、間違いなくその原因だな。だが、参加できないような人間や妖精だっていくらでもいる。けれど、それでも変わった」
　嬉しそうに目を細めて、慧音は言う。
「横からごめんなさいね。うちのお客さんも、すごく普通の人が多いんですよ」
　すっかり営業モードで、それでもなんだか嬉しそうに嘴を突っ込んでくるミスティア。そうなのか。大体真夜中、店の仕舞った後に米ることの多いリグルは知らなかった。
「わたしも、ミスティアに止められてるねー。お客さんは食べちゃダメだって」
　食い倒れ闇妖は、ちゃっかり書き入れ時も顔を出していたようで、くちの周りをタレでべたべたにしながら相槌をうつ。
「店を出た後も、ちょっかいを出すなよ？」
「わかってるよ、せんせー」
「板についてるねぇ、先生」
　けらけらと笑う小鬼。
「むう。どうも、説教臭くなっていかんな。……まあ、それは置いておいてもだ。妖怪の屋台に人が出てくる、出てこようかと思う。その程度に、人と妖の垣根が下りているんだ」
　それが良いことなのか、悪いことなのかは、わからないが。と言う慧音の顔は、けれども嬉しそうだった。そうだ、この人は里に棲む妖怪だった、と、リグルは再度思い出す。
「命蓮寺のこともあるしな。妖怪は人を襲い、畏れられるものという一点は崩せないとして、新しい関わり方を模索できる時期だと……」
「先生はお堅いねぇ。ほら、もっと飲め飲め」
「おい。萃香、止めないか、うわっ」
　実に楽しげに、枡で量って漏斗で呑んでをかましている萃香と抵抗する慧音。それが、やはりどうしてもまぶしく見えて。
　リグルは、手元の杯をもう一度飲み干した。

慧音と萃香が楽しげに大いに飲み食いし、
慧音の家だか慧音の知り合いの家だかで続き
をするなど言って立ち去ってからしばらく。
　時刻はもう、真夜中だ。

　遠くから、本日最後の鐘の音が聞こえる。
その響きは心持ち慎ましやかだ。
眠る人間を、起こさないためだろうか。
あの鐘を衝くのは、妖怪であるはずなのに。

‡　‡

　屋台のカウンターに、客は残っていない。
満足げに腹をさする闇妖に眠る妖精たちと、
唸ったり呻いたりしている虫妖怪だけだ。
「あのさ。ミスティア」
「ん、さすがにそろそろ看板だよ？　八目鰻
も泥鰌も切れちゃった」
　泥鰌も焼いてたのか。
「やっぱりルーミアがいると早いねえ」
「えへん」
「褒めてるのかなあ。いや、注文じゃなくて」
　冷め加減の熱燗で唇をうるおす。
「……屋台やってくコツとかさ、あるの？」
「え。なに、リグルも始めるの屋台？」
　稲子とか出すのかなそれじゃ話が逆さまか。
山の巫女が虫食べるらしいって聞くけどと、
果てしなく脱線していく話を慌てて止める。
「いや、そうじゃなくって。私、ほら。まえ
商売やって、失敗してるじゃない」
　そうなのだ。
「やってたっけ？」
「やってたよ！　ほら、蟲の報せサービス！」
　どこにもいくらもいる。虫の特性を活かし、
しかも慣用句とも絡めた蟲の報せサービス。
いざ、虫の一族の地位向上を果たすのだと、
張り切って始めて、ふた月と持たなかった。
「ああ。あったあった。なに、再開するの？」
「うーん……評判がねえ……」
　あっというまに立ち消えた理由は簡単で、
利用状況がまったく芳しくなかったからだ。
　かの悪名高い天狗の新聞を呼びこんでまで
宣伝したりもしたのだけれど、薄気味悪いの
気色が悪いのと散々な評判でとどめが入った。
「妖怪がやってるからかなあ、とかさ。色々
あのとき考えてたんだけど」
　妖怪とひとの間の、垣根が下がっている。
慧音のことばがよみがえる。リグルの商売が
失敗したのは、妖怪だからでないことになる。
「ミスティアの屋台さ。見てて思ったけど、
やっぱり繁盛してるじゃない？」
　慧音と萃香が立ち去った後も、入れ替わり
立ち代わりに、何組も客が訪れた。もちろん
妖怪が多かったけれど、人間だっていたのだ。
居すわったルーミアがもりもりと食べている
ので今日の儲けはうすくなりそうだけども、
評判なのは間違いない。
　残った酒をもう一口して、呟くように言う。
「……虫なのが、まずかったのかなあ」
　人間からの嫌われ者。いや、妖怪にだって、
好きなやつはあまりいないだろう。
　リグルは蛍で、ほとんど例外的に人好きが
するけれども、だからこそ嫌われている大勢
の虫たちのことが我慢ならなかったのだ。
　それが空回りした。少なくともそう思った。
「うーん。私は好きだけどねえ蟲」
「食欲的な意味でー？」
「いつものルーミアみたいなネタとか、本人
みずからによるボケ被せとかいいからっ」
「ざんねん」
　食べ物がつきて、残った串をねぶっている
（まさか、かじっている訳じゃないだろう）
食いしん坊悪友のお約束に思わずツッコむ。
「いやあ。食べるのもあるけど」
「あるんだ」
「鳥だからね。ごんべがタネまきゃー♪」
「そのネタは山の天狗のほうじゃない？」
　いい加減少なくなった酒をひとくち舐める。
カウンター向こう、ミスティアは、手際よく
店じまいをすすめながら屈託なく笑った。
「でもね。嫌いじゃないよ、本当」
「どうして？」
「そこにいるのが当たり前だしね。それに、
リグルがいるし」
「私？」
「自覚してないかなあ」
　ちょいと羽根を動かしおどけるミスティア。
「いろいろ楽しそうに語ってくれるじゃない。
リグル。だったら嫌いになれないって」
「それはさ……」
　地位向上とは程遠い気がする。

「屋台の秘訣っていう話だけどさ」

「……うん」

話が少しとんだ気がしたが、頷く。

「最初はね。ぜんぜんダメだったんだよね。夜道を歩く人を捕まえるくらいで、せっかく作った屋台が勿体ないとか」

「ああ、言った気がするなあ、それ」

真夜中にやってくると、仕込んだ蒲焼きが沢山残っていた。それを見た、小物なわりにいろいろと気にするタチのリグルは、たしかそんなことを漏らした、ような覚えがある。

「あの頃は良かったねー。ミスティアの料理、タダでおなかいっぱいたべられたし」

「いまだってずっとツケじゃない、ルーミア」

「えへへー」

えへへじゃないだろう。

「でもさ。言われて、そっかと思ったのね。せっかく屋台あるし、焼鳥対抗で頑張るなら、もっと腰を据えてやらないとって」

「ううん」

猪口が空になっていた。お銚子を傾けても、もうすっかり空っぽだ。

「私が言ったんだ」

「そうだよ。それでさ、頑張ったの。粘って粘って、ちょっと無駄に思えたけど続けてね」

その結果が、メニューを増やす大繁盛。

「時間をかけて、か」

「そうそう、何事も我慢なんだよね。きっと。私鳥頭だから、苦労はすっぱり忘れられるし」

屈託のない微笑み。間違いなく眩しい。

「きょーうのひはー、さよーならー♪」

「……私、やろうとしたら、耐えられるかな」

リグルは頬杖。ひゅうと遠く風が吹いたが、不思議と寒さは感じなかった。

「頑張れるんじゃないかなあ。リグルだし」

「私だから？」

「だってさ」

よいしょと暖簾をしまいつつ、ミスティア。

「リグルさ、私たちに合わせるので、すごい頑張ってるじゃない？」

「え」

たしかに。

夜更かしに弱いチルノと友達になってから、生活リズムを昼寄りに変えてきた。虫たちの生き方に任せていたのを、人間に似せた様な普通の妖怪風に変えたりもした。何年か前は、冬場に出歩くなんて、一寸考えられなかった。もちろん、虫たちを見捨てたりもしていない。

正直に言ってけっこう無理のある生き方だ。だけど。

「辛くないでしょ？」

「うん」

いわれてみれば、そうだ。どうしてだろう、どうしてだろうと思って。

「楽しいからじゃないかなー？」

ルーミアに、すぱっと打ちぬかれた。

「ほらチルノ、大ちゃん、そろそろいくよー」

「ううん。……あ、おはようございます」

「おはよう！　って、あれ、暗い！？」

「夜だからねえ」

いつもの調子。そうだ。確かに楽しいんだ。こいつらとつるんで遊びまわっているのも、遊びまわることができるのも。

いまの幻想郷に生きているのが。

「あれ、リグル。どっか痛いの？」

「いや、そうじゃないんだけどさ。……ねえチルノ、ちょっと聞きたいんだけど」

「任せなさい！　何何何？」

今まで寝こけていたにも関わらず、どんどん勢い込むチルノ。いつも通り。だからきっと、リグルの欲しい答えが返ってくる。

「すっごく大変なことがあるとして、でも、それがどうしてもやりたいなら、どうしたらいいと思う？

ほとんど間髪入れずに、チルノは勢いよく。

「やればいいじゃない！」

「だよねえ」

うん。

真夜中、ふっと赤提灯が消える。けれど、そこはまだ、きっと暖かい。春が来るまで。春が来てもずっと。

二月三日。明日からは、暦は春。

サービスは、啓蟄から再開の予定である。

〈作者コメント〉

ネタ的に客に阿求も入れようと思ったんですが、偉大な先人を意識しすぎて無理でした。またいずれ紙上でお会いしたいものですね。

東方茶湾虫

「節分」

クロック

善行をつむの……
もうそれしかないの……
善行もつめないなら
もう死ぬしかないの…
もうね… もうね……
ガジガジ
To me
わたし？
わたしは常に善行を
つんでるわ……ホラ…
これ善光寺の名物
七味唐辛子………
ははは、わたしダジャレて…
大罪に値するわ…
七味
ブルブル
悔い改めます…
償います…だって
わたしはヤマザナドゥ……
そうれ…えーきちゃんの
善行 見てみたい…
ぱーりらっ ぱりら――
ぐいっ
ここで罪の精算を
するんだよ
………
グオオオ
ギャオオオ
ええっと…
リグル・ナイトバグ…
フンコロガシの妖怪
To me!
ちがわい！
これより罪の精さ…
ごめん小町
大田胃散いい薬を
もう横になって
ていいから！？
半月分読むだけで
なんかもう
相当ヒクわ………
……あなた…
なかなか不遇な人生
送ったのね……
極楽に行っていいよ…
はあはあ…
そこではだれが
わたしをたたくの？
映姫様、あたい
涙が出てきましたわ…

わたし学校に帰りたい！
だって豆まきまだ途中だもの！
マジかい！？
ムリだ！仮に生き返ったとしてもまたみんなにイジメられるんだぞ！？
それよりも極楽で楽しくしあわせに暮らしたほうがいいだろ！？なっ？！
でも極楽にはてゐもみすちーもフランもいないんでしょ？
そんなとこ楽しくないよわたしはみんなと一緒にいたい！
…小町！
ここに生者がいてはいけませんね？
ははっあたいも同感です！
ありがとう小町さん！
映姫様のはからいでお前には五分の魂が宿った！
もう死ぬんじゃないぞ？
地獄にいることが幸せとはな…
いや、とっちゃあっちが極楽なのかな…
ってうおっ！？なんだ忘れ物かっ！？
えっとね、
ゴト…
今年の豆まきはえらくハードで……
救いようがねぇな！？

こう繋げる事を思いついたんです

～八幡屋礒五郎～

空振りしてませんように…

早苗さんファンの人ごめんなさい

楽屋ウラ的なにか。
～番外編～

描いた人 草加あおい

豆まきったら落下生だべさ？
（レティさん談）

紅v.s.永でもアルノデス

博麗チームと守矢チームに別れて対戦してもらいます！
博麗チーム
豆をぶつけられたら退場です。先に相手を全滅させれば勝ちとなります！

ルーミアファンの皆様ごめんなさい

頭上注意!!

さて、あとはチルノだけね
ん、丁度伝令が…

…何ですって!?
みすちーっ!逃げてっ!

うわぁ～っ!?
ズバババ…!

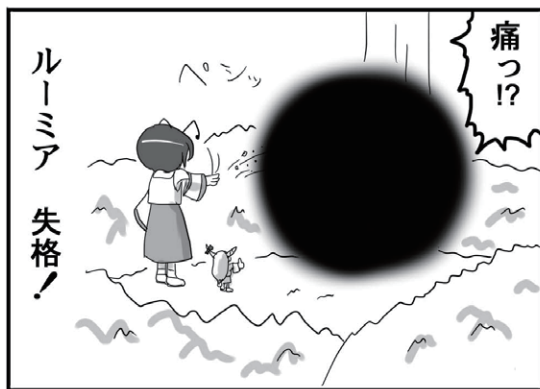
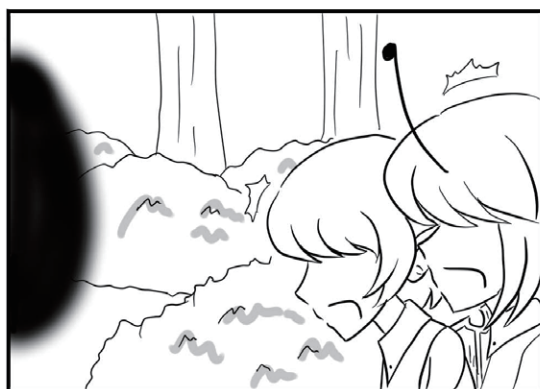
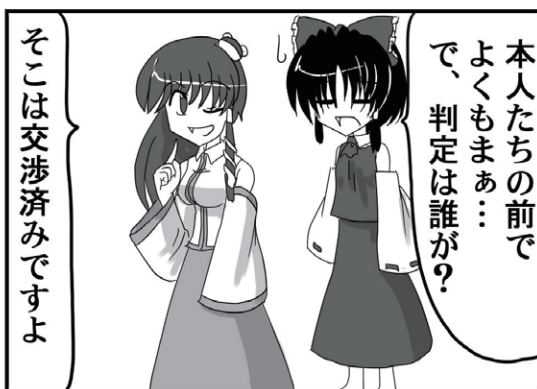
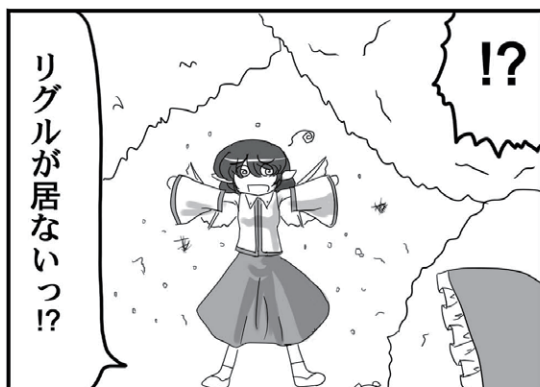
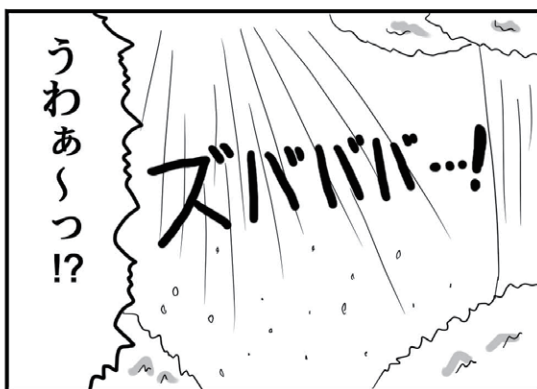
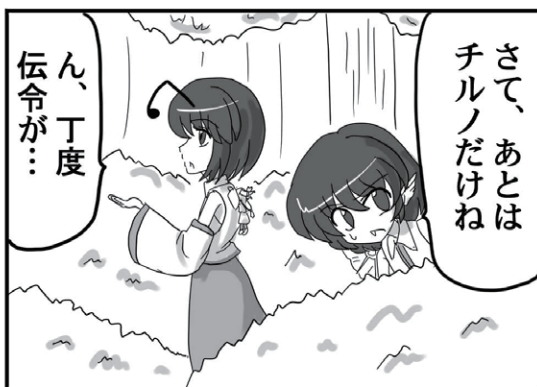
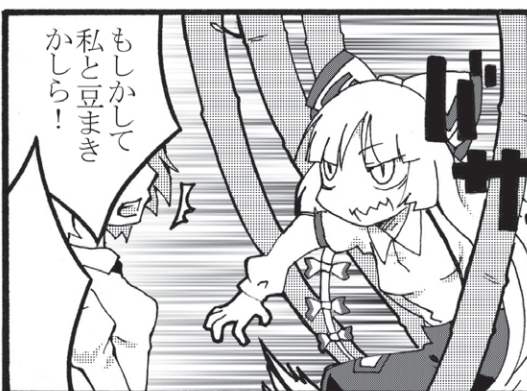
ルーミアを倒して油断したわねっ!
これでアタイの勝ちよっ!

私…鬼ですから….

!?
リグルが居ないっ!?

油断はそっちだよ!
ビシッ
ひゃあっ!

へっへ～ん!虫の力を甘く見ないでよね!
さぁ、審判私の勝ちよっ!

って…萃香さんっ!?
全滅。
奇襲時に振り落とされたらしい
企画失敗!

フェブラリィ・マイフェイバリット・リグル

『 おでかけ 』　イリイチ

早く暖かくなってほしいなあ・・・

『にゃんグル』 ADDA

何か可愛い妖怪がいるのでちょっと境界を弄ることになりました。

『 無題 』　NIGA

サンクリ５０（Bホール/コ２４ｂ）にて東方イラスト本の頒布を行いますので、
もしよろしければ一度、ご覧になってください。　【ブログＵＲＬ】http://ameblo.jp/niga-warai/

長屋突然死事件

著者：くろと

和装の部屋は散らばっていた。座椅子は倒れ、書き机や箪笥の引き出しは開いており、収納されていたものが、あらかた掘り起こされている。

　リグルは立ち尽くすように、溜め息を吐いた。

　少女とは直接の知り合いだったので、リグルは質問をぶつけてみる。

「ねぇ、どうしてこうなったの？」

「さあねえ、そこまで覚えてないわよ」

　リグルの視線の先、布団の中で一人の少女が寝息も立てずに眠っていた。

「ほんと、私、どうして死んだのかなあ？」

　リグルの隣で、亡霊少女が腕を組み、不思議そうに自分の死体を眺めている。リグルは再度溜め息を吐いた。

　リグルは少女から事情を聴いていた。どうやら彼女は死んだショックで記憶が混濁しており、死亡前後については曖昧にしか覚えていないらしい。

「布団で眠っていたら、いつのまにか死んでいたんだね？」

「そうよ。起きたら体が鉛のように重くてね。指先は動かない、声もでない。金縛りのようになってたけど、しばらくしたら体が軽くなって、やっと動ける。と思ったら、布団で死んでる自分を見つけたの。最初は病死かもと考えたけど、これといって病気持ちじゃなかったから、不思議に思ってね。だったら自殺かな、とも思ったけど、自殺する理由がなかったから。——でも虫の知らせってすごいね。死んだ人間からでもメッセージが届くなんて」

「昆虫は敏感だからね。それにしても、病死や自殺でないなら、他殺？　とりあえず、リリーか寅丸さんに伝えよう、彼女たちならこんなの、簡単に解決してくれるよ」

　リリーホワイトか寅丸星を呼びに行くため、リグルが部屋を出ようとすると、少女が両手を伸ばして通せんぼをしていた。彼女の不自然な行動に、リグルが首を傾げると、彼女は力強く言い放った。

「他力本願なんてリグルらしくない。ここは自分で解決しないと男じゃないわ」

「女なんだけど。第一、素人が下手に手出ししたら迷宮入りになるよ？」

「そんなのやってみないとわからない。私が頼んでるのはリリーでも星でもなく、目の前のリグルよ」

　少女の眼差しは真っ直ぐで、私は返答に詰った。

　彼女は畳み掛けるように正面から言い募る。

「人間でも妖怪でも、挑戦しないまま諦めるのは、怠慢よ。間違ったらごめんなさい、でいいの。人生なんて八割がたそんなものよ」

　死人とは思えない熱い台詞と、活き活きとした眼差しだった。

「そこまでいうなら、……分かったよ」

「それでこそ男の子」
　少女は拍手し、溌剌に笑った。
「だから、女だってば！」
　リグルが折り返し、再び現場に戻る。
「でも、どうしよう？　先ずは何からすれば？」
　と、リグルが思案していると、横から少女が口出しをしてきた。
「そうね。先ずは、本当に他殺かを考えよう。もしかしたら私が極端な夢遊病の持ち主で、発作的に部屋を散らかして、偶発的に病気し、突然死した可能性も、かなり低いけど、ゼロとは言い切れないもの。だから部屋と死体を調べてよ。私は触れないから、リグルがね」
「そっか」
　リグルは改めて室内を見渡した。長屋の一部屋である、八畳の部屋には障子窓が一つあり、家具は、書き机に箪笥、座椅子だけだ。また書き机と箪笥の引き出しは、一つ残らずに引き出されていた。押入れも同じように開けられている。それらの中身である書物、着物、洋服等は畳みにぶちまけられていた。それだけを確認すると、リグルは死体を見た。布団に包まれているのは間違いなく、リグルの友人で、今は亡霊となった少女である。顔も当然同じだ。着ているのは白い寝間着である。失敬して彼女の身体を調べようとする。と。
「きゃっ」
「……へ？」
　少女の小さな悲鳴に、リグルが顔を向けると、彼女は顔を赤らめ、気恥ずかしそうにしている。少女はリグルの視線に気付くと、片手を振った。
「ううん、なんでもない。ただ、こんなかたちで男の子に触られたから、つい」
「なんど言えば……私、男じゃないってば！」
「そういえばそうだっけ？」
　少女はわざとらしく答えてみせる。リグルは唇を噛んだ。
「くっ、そのうちすごいレディに……」
「それは楽しみ、でもそのころには成仏してると思うから」
「くっ！」
　あっけらかんとする少女に、リグルは口惜しそうにしながら、死体の検死を再開する。死後硬直しており、これといった外傷は認められない。しかし、リグルはある事実に感づいた。
「て、うそっ！」
　少女が、今度は本当の悲鳴を挙げた。それはリグルが、死体といきなりキスをしたからだ。しかも、リグルのキスからは口腔で舌を動かしているのだと、判断できる。しばらくしてリグルが死体から唇を離した。その際、唾液が糸を引いている。
「……うん。毒物じゃないかな？」
「それが、今の行動と、関係はあるの？」
　少女はわなわなと震えていた。リグルは少女の怒りに心当たりがないのか、眉を顰めた。それでも、リグルは説明を優先した。
「あるよ。体には注射の痕とかもないから、もしも毒薬を投与するなら、口しかないと思ったんだ。だから口腔に残っている唾液を掻き集めんたんだよ」
　ほら、とリグルは自分の舌先を見せた、唾液に濡れている。
「や、やめてよ！」
　少女は幽霊でありながら、耳まで赤面して狼狽する。しかし、リグルは気に留めず、少し興奮した面持ちで、問いただした。
「種類は分からないけど、毒が使われているのは間違いないと思う。だから、これは他殺だよ。……ねぇ、もしかして風邪薬とか飲んでいない？」
「風邪薬？」
　いささか冷静を取り戻した少女は、鸚鵡返しに喋った。それはリグルに聞いたというより、自分の記憶を思い出そうとする自問である。
「ああ、そうだ、そういえば風邪薬を飲んだかな？　風邪気味だったから。確か箪笥に片付けて……」
　少女の台詞に、リグルは嬉しそうに表情を晴らした。
「それだよ、きっと犯人が風邪薬と毒薬をすり替えたんだ！　薬をすり替えるぐらい、誰にだって出来る。そして毒薬が入っているとも知らずに飲んで、死んでしまった。あとは

残った毒薬を取り戻すために部屋を荒らしたんだ」
「なんのために？」
「証拠を残さないためにだよ。だって死体には外傷がないんだ、毒を検出しようとしても、そんな設備は永遠亭ぐらいにしかない。上手くいけば、誰もが突然死と思うしかないんだよ」
　リグルは興奮していた。少女はリグルの言葉をまとめてみる。
「つまり私は毒殺されて、その証拠品である毒薬は犯人が持っていった。というわけね。でも……」
　少女の口ぶりがくぐもった。リグルが目聡く、聞いてくる。
「どうかしたの？」
「どうかしたって、それってつまり計画殺人じゃない？　誰がそんなことをするの？　これでも私、結構いい人で通ってるから、他人から怨みなんて買ってないよ？」
　少女は正直な言葉を続けた。
「これが物取りによる強盗殺人なら、部屋を荒らしていたら、私が起きそうになったので殺した。で通るから、不思議はないけど。計画殺人なら他人から恨みを買ってないといけないわけだから、誰からの恨みもない私には、殺される動機が全然思い浮かばない」
「それは……」
　少女の言動に、リグルは言い返せず、懊悩した。
「と、とにかく、死因が毒なのは間違いないよ。そして記憶違いでもない限り、自殺じゃない。動機なんて犯人から聞き出せばいいんだし。そんなに悩む必要ないよ」
　リグルは明るく努めた。少女はクスクスと笑った。
「悩んでいたのはリグルだけどね。なら次は――」
　リグルが遮るように、告げた。
「犯人を捜してみよう。証拠は……あったとしても、もうすでに捨てていると思う、けれど部屋に誰かが入ったのは間違いがない。なんたって部屋がこれだけ荒れてるんだから」
「お、探偵先生、気分が乗ってきた？」
　リグルはムッと口をへの字にした。
「もう、茶化さないでよ。これでも真面目なんだからさ」
「ごめん、ごめん。――それでどうやって犯人を捜すの？」
　少女は当然の疑問を口にした。リグルは手筈を悩んだ。
「……たぶん、犯人は毒薬を病院――永遠亭で手に入れたんだと思う。他に薬を扱うところは思いつかないし、あっても種類が限られているだろうから。毒薬の種類が分かれば、同じ薬を買っていた人を探せばいいんだよ。そのためにも……」
「私の死体を背負って永遠亭に向かう？」
　少女は死体を見ながら、リグルに告げた。リグルも死体に視線を落とす。それは中々に重労働な気がしてきたが、ふと、簡単な解決手段を思いついた。
「肉片を持っていこう。永琳ならそれだけで十分だよ」
「うわっ」
　と、少女は引いた。リグルは仕方がないよ、と彼女に言い訳して、死体の腹部から五センチ大の肉片を抉り取った。赤黒い血肉を掴み取りながら、リグルと少女は急いで、永遠亭に向かう。
　竹林までは飛翔し、竹林からは土地の妖精に導いてもらう。ほぼ最短距離と最高速度で、リグルたちは永遠亭へと到達した。永遠亭には門番まがいの妖怪兎が立っていたが、因幡てゐの友達として紹介されていたので、快く無条件に通してくれた。
「あ、鈴仙さん！」
　ちょうど、一羽の妖怪兎が通りがかった。折れ耳が特徴の鈴仙だ。リグルが事情を説明すると、永琳ではなく、鈴仙が毒の鑑定を請け負ってくれた。リグルから肉片を受け取ると、流石に永琳の弟子だけあり、鑑定は素早かった。
「……シアン化合物ね。普通の人間なら少量ですぐに殺せる。いつだったか師匠に打たれたから間違いない。さて、これを売ったかどうかだけど、――毒薬なんて買うとしたら魔法使いぐらいだけど、仮にも病院を自負する永遠亭が、毒薬を手の届かないところに売ると思ってるのか？　里の薬屋等も同じ考えだ

ろう。分かったらさっさと帰れ、ここで治すのは生きているヤツ限定だ」
と、鈴仙が辛辣な態度で締め括ると、肉片をリグルに返して、背を向けて廊下を歩いていった。再び、リグルたちは途方に彷徨った。
「あら、リグル？　こんなところで何しているの？」
廊下を歩いてきたのは、メディスンだった。
メディスンはリグルを見て、少女を見遣り、それから首を捻って、にやりと笑う。
「もしかして浮気？　あとで幽香に言いつけてあげるわ」
「ちょっと、メディスン、変な誤解を招くような冗談はやめてよ！」
リグルが叫ぶと、メディスンは片目だけウィンクした。
「えー、なに、リグルってば私以外の女の子にも手を出しているの？」
心得たとばかりに少女が追撃を仕掛けてくる。
「だから、私は女の子だってば！」
リグルも負けじと言い返した。そうやってしばらく、言い合っていると、
「あんた等は煩いという意味を知っている？」
廊下の先から、冷たい、尖った言葉が響いてきた。
『あ』
三人が振り向くと、廊下の端で鈴仙は、紅い目を研ぎ澄まして苛立っていた。
「そ、そうよ、話なら外でしましょう。ここは何かと忙しいから、お仕事の邪魔はいけないわ」
慌てたメディスンは上ずった調子で提案し、リグルと少女もそれに納得した。
三人は門番への挨拶も忘れて、永遠亭から飛び出した。そこでリグルは冷や汗を拭いた。
「怖かった。鈴仙、一度怒ると、容赦しないからなあ」
「そういえば、先ほどの続きだけど、リグルたちは永遠亭に何をしに？」
「え、ああ、うん」
と、リグルは今までの経過を説明する。
「へぇ、そうだったんだ。だったら心当たりがあるわよ。数日前、何人かに売ったから」
身も蓋もなく、メディスンがそう言った。
リグルと少女は同時に目をしばしばさせて、うそ、と呟いた。
「嘘じゃないわよ。私を何だと思ってるの。毒のスペシャリスト、メディスン・メランコリーよ。シアン化合物でしょう？　えーと……、覚えている限りじゃ、魔理沙にアリス、それとルーミアにも売ったわよ。全員、同じぐらいの分量だったわ」
「ルーミア？　なんでルーミアに？」
リグルは眉根を詰めた。
「私も不思議に思って問いただしたら、アイツ、ほくそ笑んで『紅霧の屈辱を晴らすついでに』とだけ言ってたわ。他の二人、魔理沙は在庫が切れたため、アリスは実験で使うため、だったわ。――それじゃ、私は用があるから。さようなら」
メディスンはスカートの裾を摘まんで会釈し、竹林の中を颯爽と飛んでいった。リグルはすぐに思索した。
「紅霧……、吸血鬼の起こした異変だよね。ねえ、そのときルーミアに何かした？」
「ううん。そもそもあの子と知り合ったのは、その異変以降なんだけどね。それにさっきも言ったように、私、恨みを買うようなこと、してないから。たぶん」
リグルと少女は話し合い、とにかく三人から話を聞くことにする。
「ルーミアは何処にいるのか、わからない。先に魔理沙とアリスがいる、魔法の森に行こう」
魔法の森は妖怪の山の麓にある樹海だ。
意見が合致したリグルと少女は魔法の森まで飛翔し、多少迷いながらも、アリスの屋敷にまで辿り着く。
リグルが玄関に立つと、扉に焦げ跡が付いているのが分かった。
扉をノックする。と、待つ間もなく蝶番が軋んで開いた。
「こんにちは、シャンハイ」
リグルたちを出迎えたのは、黒いワンピースに白いエプロンドレスの人形、アリスが作ったシャンハイ人形である。リグルと少女

はシャンハイに会釈し、屋敷へと入れてもらう。
　内装はバロック様式の古風なもので、全体的に丸みを帯びていた。また、そこかしこに人形が置かれており、人形屋敷と化している。
「いらっしゃい。どうぞ座って」
　アリスはリビングにて一体の人形を針と糸で繕いながら、椅子に座っていた。シャンハイに導かれて、リグルはビロード張りの真っ白な長椅子に座る。
「何の用かしら？」
「ええ、実は……」
　リグルは今日の経験を詳細に語り、アリスの意見を請うた。
「だから、アリスがどうしてシアン化合物を購入したか、聞きたいんです」
　アリスは深く考え込む様子は見せず、あっさりと答える。
「専門的なことを言っても、わからないでしょうから。概要だけを伝えると、自律人形のテストに必要だったから購入したのよ。もう手元には残ってないわ」
　と、アリスの人形が一つの小瓶を見せた。それは空となった容器であり、中身を使い切っている。と証明していた。
「私が殺された、昨日の夜、何をしてたのよ？」
　と、少女だ。少女の問いに、アリスはこれまた、包み隠す様子もなくはっきりと答える。
「昨日は朝から外で試作人形の実験を行い、失敗したわ。試作人形が一体、暴発したのよ。一日掛けて掃除したから、その子を殺すどころか、里にすら行ってはいないわね」
「それ、証明できるの？」
　少女が追い詰めるように紡ぐ。と、アリスは眉尻を下げて、苦笑いした。
「そうね……強いて言えば、この子たちが証明してくれるかしら？」
　アリスの周囲で人形がざわめいている。その人形等はそれぞれに首を振ったり、手を振ったり、中にはジェスチャーで主張する人形もいる。
「これ以上は聞くだけ無駄かな……、失礼しました」
「お邪魔しました」
「いいえ、またどうぞ」
　アリスが手を振って見送った。リグルと少女は続いて、魔理沙の自宅に向かうため、特に化け物茸の瘴気が強い奥地へと入っていく。
　魔理沙の家は、アリスのそれよりも若干、小さかった。
　リグルは玄関をノックし、反応を待つ。しかし、家主が姿を見せなかった。
「どうしよう？」
　リグルが困った顔をする。
「私が調べてくるよ」
　と、少女が扉に顔を突っ込んだ。幽霊である少女は、もはや物理法則に縛られる理由がないため、そのまま扉をすり抜けたのである。
「どうだった？」
　一〇分ほどで、少女は戻ってきた。
「犯人は魔理沙なのかも」
「というと？」
「アリスが見せてくれたのと同じ小瓶を見つけたの。こっちも空っぽだったわ」
　少女の言葉に、リグルは渋面した。
「残るはルーミアか、あの子は何処にいるかわからないから、捜しようが……」
「だったら一度、私の部屋に戻りましょうよ。すっかり日も暮れたし、――そういえば死体を放置してきたから死臭が溜まっているかも」
　空を見上げれば、紫色の黄昏が空一面に広がっていた。
　リグルは少女に納得し、帰路へと付いたのだ。
　そうしてリグルと少女は殺人現場に帰ってくれば、ある事実が発覚した。
　リグルが少女に、半ば呆然と聞いてみる。
「ねえ、死体、片付けた？」
「触れないのに？」
　少女の部屋は、他については一切変わりなく、唯一、あるべき死体が失われていた。
「死体がない、なんで……？」
　理解に苦しんだリグルは頭を抱えて悩みだした、それは少女も同じであった。二人して

懊悩しながら、ふと、誰かの声と、小刻みよく叩く音がしてきた。それは戸口からで来客を報せていた。少女は日常の習慣から返事をした。しかし、非日常の状態なため、戸口を開ける応対までは出来なかった。なのでリグルが戸口を開けた。来客者は隣に済んでいる隣人で、回覧板を携えていた。

　来客者は先ず、リグルを見た。それから少女を見た。

「あら、あなた、死んだの？」

　来客者はさも意外そうな口ぶりだった。

「ええ、まあ、何故か。誰かに殺されたみたいで、今は犯人捜しをしているんですよ」

「それって、もしかして昨日の夜？」

「え、心当たりでも？」

　リグルが呆気に取られたように、間抜けに聞き返した。隣人は続ける。

「いえね、昨日の夜中に戸口をガンガンと叩く音がしたのよ。こんな夜中に誰かしら、と思って戸口に出ると、あなたの部屋の戸口を、黄色い髪の毛で黒っぽい服の子供が叩いているのよ。私に気付くと、顔を隠しながら、飛んでいったわ。夜だから、顔の輪郭までは見えなかったけど、てっきりあなたの友達だと思ってたわ。――また眠って、しばらくしてから、今度は隣室がドタバタと騒がしくなってきてね、夜中だったから特に物音が響いていたわ。あまりに煩いから、もう一度苦情を入れようとしたわ。だけど外に出るころには、物音はなくなっていて、遠くの空を黄色い髪の毛の女の子がすごいスピードで飛んでいったわ。ああ、静かといえば最近だけど、お医者様から糖分の摂取を……」

　隣人はそれから、意味のない無駄話を延々と続けた。それが終わるころには本格的な夜になっており、リグルと少女はぐったりとしながら、部屋に入ったのである。

「意味がわからない。まさか本当に強盗目的で……？」

　リグルは言葉を噛み締めるように呟いた。隣人の話で強盗説が濃厚になっていた。

「だったら、どうして私の死体を、わざわざ持ち運ぶのよ？　それも昨日じゃなくて今日に」

　少女が反論するように告げる。

　部屋から死体は消えていた。また、念のために部屋をもう一度、隈なく検めたが、死体以外に消えているものは、一つとしてなかった。

　リグルは悩みながらも、一つの結論を下す。

「ルーミアが犯人かも……」

「黄色い髪の毛で、黒っぽい服を着ていて、メディスンからシアン化合物を買ったから？　でも、部屋を荒らした理由は？」

「前に、ルーミアが起こした殺人事件を知ったんだけど、そのときも部屋を荒らしていたんだ。ほら、ルーミアは視界を真っ暗にするから、なにも見えなくて家具とか壁とか色々とぶつかって、それが強盗のように見えたんだ」

「ふーん。そうなんだ」

　少女もまた考え抜くように、顎に手をやる。だが、すぐに首を横に振った。

「ルーミアじゃないよ。ルーミアなら、そのまま食べるじゃない」

「それは……」

　少女の真っ向からの反論に、リグルは声を詰らせた。

「……それもそうだね」

　結局、リグルは言葉を取り消した。少女の言葉は間違いなく、正しいからだ。

「とにかく、魔理沙とルーミアから話は聞こう。他にシアン化合物を持っては――」

　言いかけて、リグルは目を見開き、はっとした。

「居る！　居るよ！　三人以外でシアン化合物を持っているの！」

「他に誰が居るの？」

　思わず少女が、リグルに聞き返した。リグルは興奮気味に、鬼の首でも取ったかのように答える。

「メディスンだよ！　彼女が売りつけたんだ。当然、持ってるじゃない！」

と、だ。

　だが、リグルの言葉に、少女は冷ややかな視線を送る。

「あのさ。メディスンはないよ。殺す理由がそれこそない。あの子は人形だよ？　何も食べない。もしも食べるとしても、それは恐怖

とかいった精神的なもので、少なくとも人肉じゃない」
　少女は、リグルの結論をばっさりと切り捨てた。途端、リグルは恥ずかしそうに赤面する。
「本当に、強盗が、風邪薬を毒薬にすり替えて、部屋を荒らし、私たちが出かけたあと、証拠隠滅に死体を持ち去ったのかも」
　少女が出した推理は、証拠能力に欠しいものだった。
「魔理沙とルーミアを探そう。それでも解決しないなら、もう諦めるしかないよ」
　リグルは決断し、少女を促した。
「そうね。解決できなくても、ごめんなさい。で許してあげる」
　促された少女は気分を一新した。戸口からもう一度、外に出ると、すでに辺りは闇夜の領域だった。と、そのときだ。
「君たち、ちょっといいかい？」
　空から幼い、しかし意思のはっきりとした声が降ってきた。
「はい？」
　リグルが見上げると、長い尾にバスケットを掛けた、灰色の妖怪が浮いていた。
「……ナズーリン？」
　リグルが固有名称を告げると、ナズーリンもまた気付いた。
「リグル・ナイトバグ。君だったのか」
　声音と一緒に、ナズーリンが地上に降りてきた。ナズーリン、寅丸星の部下である。
「私たちに何か用？」
「君たち、というよりも君の部屋にだよ」
　ナズーリンが指で示したのは、長屋の一戸、つまり少女の部屋だった。少女が首を傾げて、ナズーリンに答える。
「私の部屋？」
「そう、君の部屋だ。どうやらそこにあるらしいんだ。つまりは……数日前に主がこの近くで落とした物がね。すまないが確かめてもいいだろうか？」
「別にいいけど、――何を失くしたのよ？」
「主の沽券に係わるゆえ、出来るだけ名称は言えない。だが、大事なものだ」
　と、それだけ言って、ナズーリンは室内に入っていった。約三〇秒、それだけで探索を終えたらしい、ナズーリンが外へと出てきた。顔は曇っている。
「捜し物は見つかった？」
　リグルが聞いてみる。とナズーリンは首を横に振って、否定した。
「いや、発見は出来なかった。……迂闊だったな」
「結局、何をなくしたの？」
　リグルが再三に問い詰めてみると、ナズーリンは仕方ない、という風に溜め息を吐いた。それからバスケットより、一枚の、綺麗に折り畳まれた紙片を取り出した。
「宝塔だ」
　紙片を渡してくる。リグルが受け取り、開いてみる。
「あ！」
　号外の記事であり、見出しには八畳の和室が掲載されていた。リグルと少女には見覚えがあった。
「これ、私の部屋！」
　八畳の和室には、書き机があり、座椅子があり、箪笥がある。障子窓も同じである。さらに書き机の机上には、飲み薬が入っているはずの紙袋まで写しだされている。確かに少女の部屋だ。しかし、荒らされてはおらず、綺麗なままだった。それだけではなく、書き机の引き出しが少し開いており、中から宝塔らしき、小さな三角形が見える。
　リグルは慌てて、記事の内容を読み始めた。少女が横から記事を覗く。
　記事は『何故、宝塔が？』と銘打たれて、始まっている。
『一見、変哲のない八畳の部屋ではあるが、この部屋に宝塔が隠されている事実が判明した。発端は匿名希望さんからの、寅丸星が宝塔をなくした。という情報提供である。上の写真は、午後一一時ごろ、情報確認のため、宝塔を念写したものである。何枚撮っても、同じ部屋の写真が映し出されたため、これは確実である。では何故に宝塔がこんなところにあるのか？　それは宝塔の持ち主である、寅丸星が……』
　この先も記事は続いていた。だが、明らかにタイプしたライターの邪推を感じ取れ、参考にはなりえそうになかった。

読了したリグルは顔を上げる。それからナズーリンに向かって喋りだした。
「この記事は?」
「姫海棠はたて、という烏天狗が書いた記事だよ。昨日の午前一時、命蓮寺に頼みもしないのに投函されていてね。あまりの下らない内容に辟易したが、そこには残念な事実が紛れていてね」
「……宝塔?」
リグルが当ててみると、ナズーリンは頷いた。
「記事を読み、万が一を考えて探知をしてみた。まさか、こんな形で宝塔を発見するとは思わなかったよ。――このような下らない記事など、誰一人信じるはずもない。それに夜遅くに失礼という理由から、訊ねるのを控えたのが、間違いだった」
「ちょ、ちょっと待ってよ! 昨日まで部屋に宝塔があったってことは……!」
リグルは一つの符号に気付いた。それは少女も同じで、お互いに顔を見合わせた。
「やっぱり夜中に入ってきたヤツが犯人!」
二人は声を揃えた。
「ねぇ、ナズーリン。ダウジングで宝塔の場所、探すんでしょ。だったら私たちも案内してよ、たぶん、宝塔を持ってるのが、今回の殺人犯だから」
嬉々としてリグルが言い募る。だが、ナズーリンは首を縦には振らなかった。
「ダウジングの必要はない。殺人犯かはともかく、宝塔をここから盗んでいった犯人は判明している」
「へ?」
リグルの間抜けな声に合わせるように、ナズーリンは特定の名前を言った。
「霧雨魔理沙だ。こんな下らない記事を真面目に見て、さらに使い道の限られる宝塔を欲して、そのうえ他者の敷地に無断侵入するものは、そうそういない。つまりは何でも集めようとする収集家で、無法者。霧雨魔理沙はその条件に当て嵌まっている」
ナズーリンの言葉は正確だった。
「しかし、魔理沙は殺人犯ではない。彼女は宝塔が欲しいだけで、人命は欲していないはずだ」
それだけ言ってナズーリンは空中に跳ねた。
「では失礼するよ。これでも忙しい身なんだ、宝塔はまたの機会に取り戻せばいい」
ナズーリンが飛び去り、リグルは少女に向かって、開口一番に言った。
「どういうことだろう? ナズーリンが示してくれたとおり、部屋を荒らしたのは十中八九、魔理沙だと思う。さっきお隣さんが言っていた、黄色い髪の毛で黒っぽい服ってのも、魔理沙のことだろうし。でも魔理沙には殺す動機がない、宝塔を手に入れたのなら、なおさらにない。どういうことなのかな?」
リグルは事件を量りかねていた。少女に意見を求めていた。だが、当の少女も困惑を示していた。それもリグルとは違う問題を、だ。
「どうして宝塔が家にあったのよ?」
「え?」
「だって私の記憶には宝塔なんて影も形もない、……それに、この記事もおかしいよ」
「おかしい? いや、書かれている内容は無茶苦茶だけど、あのナズーリンが納得していたぐらいだから、宝塔があったのは本当だと思うけど……」
だったら、と少女は口走った。
「どうして部屋の中に私が眠ってないのよ?」
その言葉にリグルは再び、記事の見出しを垣間見た。
理路整然とした室内、書き机の引き出しも、箪笥の引き出し、押入れもしっかりと仕舞われて、畳には塵の一つも落ちていない。そして布団すら敷かれていない。
「……一一時以降に眠ったんじゃないの?」
リグルが確認するように告げると、少女は即座に否定した。
「私が眠ったのは、そんなに遅くない。言ったじゃない。風邪気味だって。少なくとも一〇時ごろには眠っていたはずだよ」
「だったら、やっぱりこの記事が間違いなんじゃ……、でもナズーリンも調べてるし――」
リグルは懊悩していた。情報と一緒に悩みの種が増えたからだ。
だけど、と、リグルは首を何度か振った。

「だけど、部屋が荒らされたのは一時以降で、荒らしたのは魔理沙なんだから。きっと魔理沙が真実を持ってるよ！」
リグルは眉を詰めた、確信する表情で断言した。少女はなおも記事を疑っていた。
いずれにせよ、リグルは空を飛んだ。目的としては魔法の森である。
「あ。おーい！」
それは空を飛び始めて、すぐのことだった。背後から呼び掛けられたのである。
「ルーミア！」
リグルと少女の背後からルーミアが近づいてきていた。
ルーミアと合流したリグルは早速、事件の関連を聞きだした。
「ルーミア！　えと、その……、昨日の夜は何をしていたのを？」
時間を聞かなかったのは、ルーミアが時刻を確認しないからだ。
「昨日？　魔理沙を捜して彼方此方ぶらぶらしていたよ」
「魔理沙を？　なんで？」
「ふふふ、実はね……」
と、ルーミアは含むように言って、ポケットからあるものを取り出した。それにリグルと少女は見覚えがあった。
「これを魔理沙に飲ませてやろう。と思ったんだ」
「それって……シアン化合物？」
リグルの言葉に、ルーミアは目を細めた。
「よく知ってるね。数日前にメディスンから買ったんだ。――でも肝心の魔理沙が見つからなくて、魔理沙の家にも言ったけど、留守だったんだ」
リグルはルーミアの話しよりも、その小瓶に注目していた。ルーミアが持っている、小瓶は、明らかに満杯だった。どうやら一滴も使ってないらしい。
リグルはそれをしっかりと確認してから、少女に合図した。少女も頷いた。
それから判れようとしたとき、少女が思い出したようにルーミアを引き止め、リグルに指図する。リグルもまた、思い出したように、ポケットから肉片を取り出したのだ。
「もう腐りそうだから、あげるよ」
ルーミアはそれを覗き込んで、しかし、首を横に振った。
「さっきお腹一杯に食べたから、それは要らない」
「あ、そう？」
リグルと少女は、ルーミアに笑顔で別れを告げた。
結局、リグルたちはこの後も事件を追ってはみたが、真新しい情報も得られず、解決は出来なかった。そして嗅ぎ付けたブン屋によって、記事にもされた。その記事には霧雨魔理沙が犯人説が浮上していた。だが、元々があまりに駄目な新聞だったため、聴衆は歯牙にも掛けなかった。さらに当事者である少女も、あまり現世に留まっては居られず、三途の川に向かい、事件は風化した。
事件の話を、リグルは喫茶店のテーブル席で、幽香に話していた。その体験談を、幽香は退屈そうに欠伸をし、眠たそうな目蓋で、いかにも無気力に聞いていた。
「この事件、幽香はどう思う？」
話の最後に、リグルが意見を求めてきた。なので、幽香は一言に答える。
「事件ねえ……。今の話だと、ルーミアが犯人じゃないの？」
にべもなく幽香は答えた。リグルが目蓋を何度か開閉し、え、と頓狂な声を挙げる。幽香は無視して、紅茶を一口だけ啜った。しばらくして、リグルがテーブルに身を乗り出した。
「どうして？」
「一番の理由は、他の被疑者に動機がない。説明してあげるから、とりあえず座りなさい」
リグルは着席した。幽香も紅茶を置いて、説明をする。
「今の話だと、被疑者は魔理沙、アリス、ルーミア、メディスンとなる。これは毒薬、――シアン化合物を手に入れられたかで判断したわ。ただし、毒を扱う妖怪は大量にいるから、その気になれば、リグルにだって手に入る。確か、地底にも病気を操る妖怪が居たわね。ただし彼らは純粋な目的で毒を用いる、食欲

を満たすための狩りにね。今回の場合、それも一部含まれているわ。ルーミアの行動を表すなら、

１・毒薬と風邪薬をすり替え、自動的に殺害する。

２・死亡後、部屋を訪れて、死体を押入れに隠す。またこのとき、どこで手に入れたかは知らないけど、宝塔を引き出しに入れる。外に出て玄関を打ち鳴らし、わざと隣人に目撃される。

３・姫海棠はたてに宝塔の情報を匿名で提供する。時刻としては一一時ごろ。

４・号外が出されたら、それを魔理沙が手に入れるように手筈する。魔理沙が宝塔を手に入れるべく出払ったら、魔理沙の家に侵入、使用済みの空瓶と魔理沙の小瓶を入れ替える。

５・魔理沙が居なくなった後で事件現場に入り、死体を食べようとする。しかし、亡霊の兆候が表れたため、計画を少し変更。部屋を荒らし、死体を布団に移す。

６・事件発覚後、死体を誰かにとられる前に、隙を見て独り占めにする。

７・リグルたちに満杯の小瓶を見せ、無罪を主張。

８・天狗に情報を流し、魔理沙に罪を着せる。

以上ね」

幽香によってなされた大雑把な説明は、大変に無茶苦茶な展開であった。リグルは驚いて目を見張る。

「この計画は考えが足らず、結果として運に頼ったところが多々あるわ。例えば、はたてが記事にしなかったら、魔理沙が記事を無視したら、魔理沙がシアン化合物を使っていたら。でも持ち前の強運で乗り切ったみたいね。――犯行動機は紅霧異変の復讐に魔理沙を犯人に仕立て上げること。そのついでに空腹を満たすこと。かしらね」

（終）

〈作者コメント〉

これを推理と言い張っていいのだろうか

preludenano

う〜…

月
バグ

どうした
リグル？

あ
てゐ

どうやら私の漫画が
パクられちゃったみたいで
ちょっと悔しいの

あらら？

【完全に一致！】

まさかあらかじめ
私の着地地点を

まさかあらかじめ
私の着地地点を
計算していた
というのか

P

K

じゃあさ

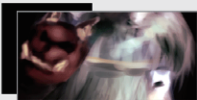
パクリ返したら
いいんじゃない？

ということで
失礼しま〜す
…

えっ

よりによって
目に入れる奴なの!?

呼ばれた気がした
とりあえず
養分吸えばいいのかな？
ウサァ!?
呼んでへん
呼んでへん
っていうか養分吸うとか
そういうレベルじゃないよ!?
Fin.

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

団地路地裏の鬼担当
蛍光流動

p2

四季団地で豆まき。

東方茶湾虫
クロツク

18p～20p

去年はチルノと幽香さんだったので今年は慧音と妹紅で。
今回登場しました七味は冬コミで怒羅悪さんにいただいたものです。
えいき様はオエってしてますがとてもおいしい七味でしたよ？
ありがとうございました！今年もよろしくおねがいします！

ほたりぐる～八幡屋礒五郎～
怒羅悪

21p

こんばんわ、どらおです。
クロツクさんが出してなければワタシはただのバカです。
それでは失礼しました～

無題
草加あおい

22p～24p

リグルさん以外の扱いがアレですが、月刊ナイトバグということで
ご容赦いただけると幸いです。えっ？『普段のリグルさんの扱いが
アレじゃないか』ですって？切腹。

フェブラリィ・マイフェイバリット・リグル
13

25p

身体に優しいカロリーオフ、のコーナーを目の仇にして
生きています。

オマージュとおまんじゅうは完全に一致
preudenano

39p～40p

これであいこだぁぁぁぁぁぁぁ！！！

表紙
小崎

右手をごらんください。
対向車線がガラガラでございます。

NEXT▶ 次号3月号は2月22日（火）発行予定！

※次号の投稿締切は2月15日(火)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG 2011年2月号

2011年1月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

○（仮名）
くろと
貴キ
蛍光流動
残虐非道の貴公子
東
豆板醤
13
クロツク
草加あおい
preudenano
怒羅悪
ADDA
NIGA
イリイチ
キッカ
小崎